

二〇二三年度法科大学院入学試験問題

小論文

注意事項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙は一枚配付します。
- III 解答にあたっては、黒インクのボールペンまたは万年筆のいずれかを使用してください（ただし、インクがプラスチック製消しゴムで消せないものに限ります）。それ以外で解答用紙に記入した場合は、無効とします。また、解答用紙欄外へ記入されているものは採点の対象としません。
- IV 解答を訂正するときは、訂正部分が数行にわたる場合は斜線で、一行の場合には横線で消して、その次のマス目から書き直してください（余白には書かないで下さい）。修正液・修正テープを使用してはいけません。
- V 解答は横書きで記入してください。
- VI 試験時間は六〇分です。
- VII 問題は十ページで一問です。

問題 次の【資料1】及び【資料2】を読んで、後の問いに答えなさい。

【資料1】

まず、「移民」や「難民」という言葉は、人間の歴史の上では極めて新しい言葉であり概念であることを理解してください。移民や難民は、19世紀に国民国家が最終的に成立し、国境を厳しく管理するようになってから初めて生まれた新しい概念です。もともと人類は、ホモ・モビリタス（移動する人）として地球上を自由に移動する存在であって、あえて移民や難民と呼ぶまでもありませんでした。

もう一点、理解しておいてほしいのは、移民や難民は押しなべて優秀だという事実です。

想像してみてください。チベットにラサという町があります。とてもいいところです。ただ、標高が3600メートルと富士山の頂上とほぼ同じ高さにあります。野菜も果物も採れないので、すべて麓からトラックで運んでいます。そのラサに、現在の年収の2〜3倍の報酬を得られる仕事があつて招かれています。皆さんは行きたいと思うでしょうか。

おそらく、行きたいと思う人のほうが少ないでしょう。いくら年収が上がっても、そんなところへ行ったら高山病になるかもしれないから不安だとか、新鮮な野菜や果物が食べられないなんて不便だと、抵抗を覚えるからです。

でも、体力に自信があり、「一発当てたい」という野心や、「新しいことに挑戦したい」という進取の精神に富んだ人の中には、進んで行きたいと思う人がいるでしょう。

この仮定の話でわかるように、実は移民や難民は、心身ともに頑健で強い意志を持つ人が多いのです。人はホモ・モビリタスですが、同時に怠け者でもあるので、基本的には生まれ育ったところで暮らしたい動物です。それでもほかの国へ行こうとするのは、それだけの強靱な意志と体力がある証拠です。そして、歴史的にはそういう進取の精神に富んだ人々を受け入れた社会が栄えてきたのです。

〈中略〉

日本は、元来移民がつくった国です。3万8000年前ぐらいに対馬経由で朝鮮半島から人が入ってきて、それから1000年後に今度は琉球から入ってきて、さらに1万2000年後にシベリア経由で北海道から入ってきました。この3つのグループの移民が混ざりあってつくった国が日本です。

〈中略〉

そのような経緯を踏まえると、もともと移民がつくった日本という国で、どうして移民を否定するのだという話になります。日本人は単一民族だからという明らかに事実と反する理由で移民や難民は日本社会にそぐわないなどという人は、不勉強というほかありません。

日本は事実上、世界第4位の移民受け入れ大国です。2019年12月末の在留外国人数は約293万人と過去最高を記録しています。スーパーやコンビニ、飲食店、建設現場、工場など、日本中のいたるところで、たくさんの外国人が働いています。

2019年4月から施行された改正出入国管理法のもとで、政府は5年間で約34・5万人の新たな外国人を受け入れようとしています。しかし、政府のやろうとしていることは、チップレイバー（安価な労働力）を導入して当面の労働力不足を凌げればよいという弥縫策^{びほうさく}で、のちに災いを残しかねません。

なかでも、1993年に導入された技能実習制度は、最低賃金以下の薄給で外国人を働かせているケースが多々あり、人権上の問題が指摘されています。16世紀、カール5世（カルロス1世）治下のスペインで行われていたエンコミエンダ制（アメリカ大陸でキリスト教を布教するという名目で、スペイン人が先住民を酷使した制度。事実上の奴隷労働を先住民に課していた）と同じではないかと酷評する人もいます。

そんな取り繕いではなく、まず日本社会を年齢、性別フリーで女性や高齢者も働きやすい社会に改革したうえで、優秀な

移民や難民を受け入れるべきです。日本は先進国の中で男女差別が一番厳しい国です。このような現実を据え置いて外国人をチープレイバーとして受け入れたら、男性、女性、外国人という3つの階層が生まれるのは目に見えています。その結果、格差が広がり、社会が不安定化に向かうことは避けられません。

来る側にとっても受け入れる側にとっても共に都合がよい形で外国人が増えていくには、大学の国際化が大きく寄与できると僕は考えています。

〈中略〉

アメリカでは110万人の留学生在が学んでいます。アメリカの大学は授業料が高く、一流校だと7万ドルをくだらないともいわれています。生活費を含めれば1年に日本円で1000万円ぐらいはかかる計算になります。もちろん奨学金制度なども充実しているので、留学生の全員が1000万円を持ち込むわけではありませんが、留学生が持ち込むお金は約5兆円という推計もあります。つまり、アメリカの大学は高い国際競争力のおかげで毎年5兆円の有効需要を生み出しているのです（ただし、現時点においては新型コロナウイルス感染症拡大の影響で留学生在が激減し、アメリカの大学の多くが経営危機に陥っているという情報があります）。

日本で5兆円以上稼いでいる輸出産業がいったいくつあるでしょうか。自動車産業ただ1つです。

さらにこの110万人の留學生は、ユニコーン（評価額が10億ドル以上の新興企業）など新しい産業を生み出す母胎になります。外国人の移民を受け入れるのであれば、チープレイバーではなく、まず留學生から始めるべきです。新型コロナウイルスの影響で、当面、労働者にせよ留學生にせよ、国をまたいで人の移動は制約を強いられますが、長期的に見て、日本のとるべき選択肢はほかにはないと思います。

移民や難民が入ってきたら治安が悪化し、犯罪が増えるという声もあります。データ（エビデンス）で見てください。

過去四半世紀、日本で働く外国人の数は増え続けています。一度も減ったことはありません。一方、犯罪数はどうかとい

うと、1990年代は増加傾向にありましたが、2006年からはほぼずっと減り続けています。この事実からわかるのは、外国人が増えても犯罪は増えなかったということです。移民や難民が入ってきたら犯罪が増えるというのは、単なる憶測にすぎません。

そもそも人間をセパレート（分離）するという発想は新しいものです。人間社会の本来の成り立ちはセパレートではなくインクルージョン（包摂）です。

〈中略〉

人間社会の歴史の始まりは、このようにインクルージョンが基本だったのです。

ところが、産業革命によって工業が主役になると、ハンデイのある人は工場労働には不向きなのでセパレートしようという考えが生まれてきます。均質な労働者は国民国家の要請する国民皆兵にも向いているので、あつという間にセパレートの考えが広まりました。学校教育がその典型です。

とくに日本人はこの「セパレート」指向が強く、障がい者施設や高齢者施設を、「自然の豊かなところがいい」などという口実で、山の中につくったりしています。それは実際には、異分子をセパレートしようとする、歪んだ考え方です。

移民や難民についても、同じようにインクルージョンで考えるべきです。移民や難民は犯罪者の温床で厄介者だなどというイメージは根拠のない色眼鏡であって、あまりにも不見識な意見といわざるを得ません。

〈中略〉

外国人はゴミ出しをきちんとしてくれないとか、排水管に油を流されたといった、マスコミが興味本位でとり上げる地元

住民とのトラブルも、一定期間日本語を教え、最低限守ってほしい日本の生活様式を理解してもらおう教育サービスを社会が提供しさえすれば、解決する問題です。

移民や難民に対してもっと門戸を広げることは、日本が先進国として国際社会で果たすべき責務です。と同時に、日本が経済の閉塞状態を打破し、社会が成長していくためには、移民や難民のダイバーシティにあふれた優れた能力を借りることが不可欠です。

〔出口治明「自分の頭で考える日本の論点」(幻冬舎新書)より〕

【資料2】

移民を三つの基本的な条件を伴う取り決めと見なすといいかもされない。

条件1 受け容れ国は移民を入国させる。

条件2 移民はその見返りとして、たとえ自分の伝統的な規範や価値観の一部を捨てることになっても、受け容れ国の少なくとも基本的規範と価値観だけは採用する。

条件3 移民は十分同化したら、やがて受け容れ国の、対等で歴とした成員となる。「彼ら」は「私たち」になる。

〈中略〉

議論1 移民の取り決めの最初の条件は、受け容れ国が移民を入国させることを謳っているにすぎない。だが、これは義務として捉えるべきなのか、それとも恩恵と見るべきなのか？ 受け容れ国は誰に対しても門戸を開く義務があるのか、それとも、選ぶ権利、さらには移民を完全に停止する権利さえ持っているのか？ 移民賛成派は、受け容れ国には難民だけではなく、仕事やより良い未来を求めて、貧困に喘ぐ国からやって来る人も受け容れる道德的義務があると考えているようだ。

とくに、グローバル化した世界では、すべての人が他のすべての人に対して道徳的義務を負っており、そうした義務から逃げる人は利己主義者か、人種差別主義者でさえある、と。

それに加えて、完全に移民を止めることは不可能で、どれほど多くの壁や柵を設けようと、必死になっている人は必ず抜け道を見つかる点を、多くの移民賛成派が強調する。だから移民を合法化して公然とこの問題に対処するほうが、人の密輸や不法就労者や正規の身分証明書を持たない子供の巨大な裏社会を生み出すよりいいというわけだ。

移民反対派は次のように応じる。もし十分な力を行使すれば移民を完全に止められるし、隣国の残忍な迫害から逃れてくる難民のケースぐらいは別として、門戸を開く義務はない。たとえばトルコは、必死に脱出を試みるシリアの難民が国境を越えてくるのを許す道徳的義務がある。だが、それらの難民が今度はスウェーデンへ移ろうとしたら、スウェーデン人はそれを受け容れる義務はない。仕事や福祉を求める移民に関しては、入国させるかどうかや、どのような条件を課すかは、完全に受け容れ国次第だ。

移民反対派は、どの人間の集団も持っている最も基本的な権利の一つは、軍隊によるものであれ移民によるものであれ、侵入から自らを守る点である点を強調する。スウェーデン人は懸命に努力し、計り知れないほどの犠牲を払って、繁栄する自由民主主義を築き上げたのだし、シリア人が同じことをやり遂げられなくても、それはスウェーデン人の落ち度ではない。もしスウェーデンの有権者が、どんな理由からであれ、これ以上シリアの難民を受け容れたくないのなら、彼らには入国を拒む権利がある。そして、仮に一部の移民を受け容れるにしても、それはスウェーデンが果たす義務ではなく、差し伸べる恩恵であることが、明白そのものであつてしかるべきだ。つまり、スウェーデンへの入国を許された移民は、自分がこの国の主であるかのように要求のリストを手にとって来るのではなく、何であれ手に入るものには心底感謝するべきなのだ。

移民反対派はさらに続ける。そのうえ、どの国も何なりと好きな移民政策を採用し、犯罪歴や職能だけでなく、宗教のようなものにさえ基づいて移民を選別できる。イスラエルのような国がユダヤ教徒だけ入国を認めることを望み、ポーランドのような国がキリスト教徒であるという条件を満たす中東の難民だけを引き取ることに合意したら、それは不快に思えても、イスラエルやポーランドの有権者の裁量の範囲に完全に収まっている。

議論2 移民の取り決めの第二の条件は、移民は入国を認められたら、その国の文化に同化する義務があると謳っている。だが、どの程度まで同化するべきなのか？ もし移民が家父長制の社会から自由主義の社会に移つたら、フェミニストにならなければいけないのか？ とても信心深い社会からやって来たのなら、非宗教的な世界観を採用する必要があるのか？ 伝統的な服装規定や食べ物タブーを捨てるべきなのか？ 移民反対派は厳しい要求を突きつけ、賛成派ははるかに緩やかな基準を当てはめる傾向にある。

移民賛成派は次のように主張する。ヨーロッパそのものがきわめて多様で、地元民の意見や習慣や価値観もさまざま。だからこそヨーロッパは活気に満ちていて強力なのだ。実際にそれに即して生きるヨーロッパ人などほとんどいない、想像上のヨーロッパのアイデンティティを固守することを、なぜ移民は強制されなくてはいけないのか？ 〈中略〉もしヨーロッパに本物の基本的価値観があるとすれば、それは寛容と自由という自由主義の価値観であり、それはヨーロッパ人が移民に対しても度量の広さを示し、他の人の自由や権利を侵害しないかぎり、彼らが自らの伝統にできるだけ自由に従えるようにすることを意味する。

移民反対派は、寛容と自由が最も重要なヨーロッパの価値観であることには合意するものの、多くの移民の集団、とりわけイスラム教国からの移民の集団は、不寛容で、女性嫌悪で、同性愛恐怖症で、反ユダヤ主義だと非難する。ヨーロッパは寛容性を大切にするからこそ、不寛容な人があまりに多く入ってくるのを許すわけにはいかない。寛容な社会は非自由主義の少数派の小集団にならうまく対処できるけれど、もしそのような極端な人々の数が一定の範囲を超えると、社会の性質そのものが変わってしまう。中東からあまりに多くの移民を受け容れたら、ヨーロッパは中東のようになってしまいうだろう。

移民反対派のなかには、もつとずっと先まで行く人もいる。国民のコミュニティはたんに互いに許容し合う人々の集団ではなく、それをはるかに凌ぐものであることを、彼らは指摘する。だから、移民はヨーロッパの寛容の基準を固守するだけでは十分ではない。イギリスやドイツやスウェーデンの文化の独自の特徴も、それがどんなものであるにせよ、多く採用し

なくてはいけない。各国の文化は、移民を許すことにより、大きな危険を冒し、多大な経費を負担している。自らをも破壊するべき理由などない。いずれ完全に平等な待遇を与えるのだから、完全な同化を要求する。イギリスやドイツやスウェーデンの文化にどこか受け容れ難い奇妙な点があるというのなら、他のどこへなりと行っても、いっこうにかまわない。

〈中略〉

議論3 〈中略〉移民をめぐるヨーロッパ人の議論は、善と悪の間の明確な戦いには程遠いことがわかる。移民に賛成する人が、反対者全員を不道徳な人種差別主義者扱いするのは誤っているし、その一方で、移民に反対する人が、賛成派全員を道理のわからない国賊扱いするのも間違っている。移民をめぐる議論は、二つの正当な見方の間の議論であり、通常の民主的な手順を踏んで決着をつけることが可能だし、そうするべきでもある。民主主義はそのためにあるのだから。

民主主義のメカニズムがどのような結論に至ろうと、心に留めておくべき大切な点が二つある。第一に、地元の人々が不賛成なら、どんな政府も大規模な移民の受け容れを強制するのは間違いになる。移民を受け容れるのは、長期に及ぶ困難な過程であり、移民を首尾良く統合するためには、地元の人々の支援と協力が欠かせない。ただし、この原則には一つだけ例外がある。どの国も、死を免れるために隣国から逃げてくる難民には国境を開く義務がある。たとえ地元の人々がそれを見込んでいなくても。

第二に、国民は移民に反対する権利を持っているとはいえ、外国人に対する義務も依然として負っていることに気づくべきだ。私たちはグローバルな世界に生きており、好むと好まざるとにかかわらず、私たちの生活は地球の裏側の人々の生活と分かち難く結びついている。彼らは私たちのために食糧を生産し、衣服を製造し、私たちの石油の価格のために行なわれる戦争で命を落とすかもしれないし、私たちの手ぬるい環境法の犠牲になっているかもしれない。私たちは、彼らをはるかに彼方に暮らしているというだけで、彼らに対する倫理的責任を無視するべきではない。

〔ユヴァル・ノア・ハラリ／柴田裕之訳〕「21 Lessons | 21世紀の人類のための21の思考」(河出書房新社 より)

〔問〕 **【資料1】**を読み、(1)筆者の移民・難民の受け入れに関する結論とその論拠をまとめ、(2) **【資料2】**を参考とし

て、これについて批判的見地から検討したうえで、(3)移民・難民の受け入れに関するあなたの見解について結論と論拠を簡潔に示しなさい。(800字以内)